平成8年1月29日

みんな一緒に考えよう『ごみ・リサイクル』

外国人との懇談会開催

２９日、豊島区立生活産業プラザ(東池袋1-20)で、外国人をまじえたリサイクルに関する懇談会が開かれた。

豊島区は現在のところ約２０人に１人と、都内でも有数の外国人居住者の多い区である。外国人の方ごみ・リサイクルに対する意見、要望を聴く機会をもとうということで平成６年度に２回実施されており、今回で３回目の実施となる。

これまでの懇談会では、豊島区や東京都のリサイクル、清掃事業をより理解してもらうための説明や、自国でのごみの出し方、リサイクルについての取り組み方などの意見交換が中心であった。

今回は、さらにリサイクル運動を実践されている区民（豊島清掃協力会婦人部、リサイクル協議会、豊島区消費者団体連絡会）に参加してもらい、日常生活におけるごみ・リサイクルに対する意見交換を行った。

区内でリサイクル運動を実践されている区民の方が活動の紹介、説明につづき東京のごみ事情や豊島区のリサイクルについてのビデオを見た後、懇談に入った。細かい分別の仕方がよく分からないといった質問や、留学生はお金を余り持っていないので、粗大ごみの手数料をはらうのが負担になってしまうため、夜間に出してしまったりする場合もある（これは一般区民のなかにもある話だが）などの話があった。このほか、

アメリカ人の男性は「アメリカではリサイクルをしようと思っても車で移動をしなければならない。この間のガソリン代などの補助があればもっとリサイクルも進むと思う。その点、日本のひとたちは、お金をもらわずにリサイクルに取り組んでいるのが信じられない。けれどもとても感心しました

中国人の女性は「ごみの分別の仕方のチラシやリサイクルルーム、フリーマーケットの情報を日本語学校に提供するともっと喜ばれると思います」

１６年前にハンンガリーから来日した男性は、「ヨーロッパでは貨物列車が各国を回っている。その中で引取り手のない荷物を開けてみると放射能であったり、産業廃棄物なども発展途上の貧しい国の小さな工場に持っていってしまいそのままの状態になっている。日本はそれに比べると規模の小さいごみ問題だと思います」

これら外国人の人たちの話を聞いて、「日本は国境が接していないので、緊張感が違うんですね。産業廃棄物の他国への不法投棄の話など勉強になりました」と区民のひとりも話した。

詳細　リサイクル事業課長